山の幸と世のしあわせ

最近マツタケの作柄予測は，その地域の山の状況と，発生時前２～３か月間の降雨日数等により，ある程度の見通しができるまでになった。

全国マツタケ生産量の推移は，昭和28年を100とすれば，現在は３程度と激減している。

その理由は，マツタケの出易かった山が，手入れ不足によってマツタケ菌の住みにくい環境になってしまったこと，菌の宿先である松の細根に年を取り過ぎたものが多くなった，さらに松くい虫により産地（西日本地帯）のマツタケ山の松が枯れて減ったこと，が大きな理由とされている。

これ等の理由の中で，マツタケ菌の生態と大きく係わりのある因子の活用に結びついた環境改善施業の手法が求められれば，マツタケの増収化が将来は可能となるであろう。

昭和56年の国産マツタケでは，本県産が味・香りも良く，30トン前後でトップ，次いで京都，広島県産となった，この様な傾向は今後当分の間，同様と見てよいであろう。

しかし，本県のアカマツ林にも，北，中信の一部で御承知のように松くい虫被害が発生し，特にその被害パターンは従来の西日本型の松枯れ現象とはやゝ異り，傾向としては東北型に似ている。

当面の対応としては，その発生生態と適切な防除手法の解明を急ぎたい。

マツタケ減収事情からもわかるように昔の森林，山の生業（なりわい）と，現状とでは大きく変った。

でもこの様な世の中に，将来良質な木材やきのこ等の林産物が豊作で，再び山の幸はマツタケで代表されると言われるような豊かな活気溢れる山里づくりに頑張っている若者や林業人のいることを忘れてはならないだろう。

国民の生存に強くかゝわりのある環境としての森林，それを維持する山村の生活と経済に役立つ技術の開発と対応が今ほど必要とされる時はないであろう。　（所長　横道寛久）